淨土

昭和十年五月二十日　第三種郵便物認可　（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日　運輸省特別投承認雑誌　第三二五号
昭和四十八年十月二十五日印刷　昭和四十八年十一月一日発行

第三十九巻　第十一号

1973

11

十一月号

——目　　次——　　表紙『鷹の図』松涛達文画

墨染源空の芳躅を慕いて……戸川霊俊……（2）

特集　開宗八百年と私〈中〉……宝田正道・裏辻賢洲・薮内好禅……（5）

御法語に導かれて……北村謙順……（12）

選択集講話⑩　四つの念仏生活の心がまえ……真野竜海……（16）

念仏・人と歴史⑩　関通上人……大橋俊雄……（21）

新刊紹介　玉山成元校訂『西福寺文書』……（24）

異僧真覚〈第二十一回〉……柴田六五郎……（26）

「道」伊勢への道……高橋良和……（30）

浄土宗の国宝「富岡鉄斎の画幅」……田中祥雄……（32）

カット　大正大学美術部

しるしなくば、わが心をはづべし

——法然上人一百四十五箇条問答——

「祈れどもしるしなきこそしるしなれ、祈るこころに誠なければ」と歌われている通りなのです。法然上人は病気なおしや金もうけ目当ての信心は本当の信仰ではないとせられた一面、病などに苦しむ人がみ仏の救いを求めて念仏されることは、むしろこれを認められれのでした。九条兼実公の政所や鎌倉二位の尼へのおたよりなどに「きみたちのお祈りの料にも念仏がすぐれています」と述べています。まごころこめて仏に祈るとき、必ずや感応道交、み仏は答え給うとの御信念だったのでしょう。至誠天に通ずで、自らの心の至らなければこそみ仏もこたえられぬと、深く恥じねばならないとされたのです。心の底からの念仏にこそ、み仏の慈悲の光りは明々とそそがれることを知るべきでありましょう。

（康）

墨染源空の芳躅を慕いて

戸川　霊俊
（京都市左京区黒谷西住院住職）

秋も、もう深い。ときおりの北山しぐれに楓の葉も濃く色づいて、霜の朝は、肌に京特有の底冷えをほのかに覚える。

今日は、どういう仏日であろう。めづらしく、「お――」「お――」と托鉢の雲水の声が、暁闇をついて、私の草庵のほとりの路の彼方から聞えてくる。

昔から、このあたりの路を托鉢するのが慣例の南禅寺僧堂の雲衲の声だ。

網代笠の下から窮う世外超然の若き風貌、素足わらじに孤身を托し、世濁に一脈の清涼の禅風を挙せんとする清冽恬淡の青雲の声―これを見、これを聞くとき、思わず身をひきしめられる感がする。

この雲水僧の姿こそ、まことに掬すべき求道の姿であり、同時に、これこそが伝道の姿ではないであろうか。

参客に接しては慈眠春風駘蕩、しかし、みづからと会下への提撕（ていせい）には、秋霜烈日の慨をもって聞えている南禅僧堂の師家S老師は、嘗て、私に語られたことがある。――

『この頃は、禅をわかり易く話してくれと

いう人がある。また、この頃は、禅を鮮やかに、上手に、わかり易く解説される老師方すらある。しかし、当方では、そんな器用な、巧妙な解説は出来ないし、しもしない。そんなにまでして道を伝えるべきでない。真に、道を求める者ならば、その難解な提唱に、修行に、進んで飛びこんでくるべきではないか。自分は、程度を下げて話しをしようとしない。現代的解釈などは、とても。道を求め、法を求める者は、師に迄、自らを高めて参ずべきと思う』

――その様な意味のことを訓えられたと追想する。そして――『あなたの宗の宗祖法然上人が、そうではなかったか』――と。

四十三歳、人生初老も過ぎて、漸くにして自らの救われの道を発見された法然上人が、その道を、時代の悩める人達にも伝えんと、永年修道の比叡黒谷の山房の生活を去り、台嶺を下りて、先づ東山真如堂真正極楽寺の三国伝承の阿弥陀如来に、感謝と願いの合掌を捧げて、そして、あたりの粟原岡の上に立たれ、わが行く京の街を眺められた時の伝記の語るみ姿に、私は逞ましき伝道者源空の真姿を想うのである。しかも、伝道者源空のみすがたの中に、父を凶手に失うた少年の日よりの、自己解放、自己内証のための、悪戦苦闘とでも譬うべき、求道に徹底された求道者源空の面影を偲ぶのである。

道を伝えるとは容易のことでない。軽々に考うべきでない。死を賭する底の深刻な求道の体験の裏づけなしに、道の伝えはあり得ない。

亡き父の遺言、怨敵への憎悪妄執の念、師との葛藤、その時代相、あらゆるものが素因となり、契機となっての青年時代の日々の苦悩。それを超克せんための南都北嶺、その他の碩学巨匠への参学求道であった筈である。

高祖善導大師の観経疏の中の、あのわずか一章句によってもたらされた、回心経験に至るまでの、文字通り骨身を削る求道の道程、これを看過ごして、真の伝道者源空観は成立

しないと思うのである。

開宗八百年とは——法然上人が、自己の力を絶して、大きみ力に包摂されたと自覚された回心の刹那のことであると私は信じるが、それ故にこそ、法然上人のみ跡を歩まんとするならば、求道者源空の血のにじむ求道の生涯の追体験に徹することが本意でなければならない。

このごろ、宗門の少壮の人たちによって、各地において黒染脚絆の念仏大行進なる催しの行なわれることを耳にする。

「宗祖に還れ」の合言葉は美しい。しかし、心なき一部のジャーナリズムは、興味を唆るほどに念仏の大デモストレーションと業々しく伝える。

黒染、脚絆、網代笠の姿は、形においては宗祖に還るの姿ではあろう。しかし、それは世俗の好奇に投ずるデモンストレーションであろう筈がない。

どこまでも、時代の警しめとなり、時代の灯びとなる伝道者の使命感に満ち満ちたものでなければならない。

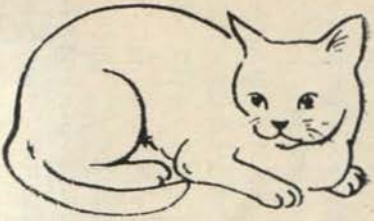
伝道者であるならば、求道者源空の精神の徹透する、求道者自らばなけれでならぬと思う。

近づく開宗記念の日を慶讃して、各地各寺に、造寺造塔、そして各種の記念行事がしきりに催されている。法要もよろしい。何々大会と称するものもあってよろしい。

しかし、開宗の刹那——回心の刹那に到達される迄の、更に、それに続く全生涯かけての法然上人の求道生活が、追慕体験されることの忘印がなければ幸いである。

時には、私の草庵のあたり、一乗寺円光尼僧堂の雲水托鉢の声も聞える。

「この頃は尼僧志願も無くなりましてねえ」と末庵の明導庵主は慨かれる。それでも、二人、三人、若い尼僧が素足わらじ、手甲脚絆に、すき透る声で流してゆく。つめたい晩秋の朝、わたくしは伝道者、求道者の姿を教えられるのである。



特集

開宗八百年と私（中）

宝田正道
（TBSブリタニカ編集局次長）

このごろ、特に大都会では、車掌のいない、いわゆるワンマンカーと称するバスが一般化して、だれでも気軽にそれを利用しているが、東京と京都では、このワンマンカーの乗り方に若干の相異がある。

東京のバスは前から乗って中または後扉から降りるのが普通であるが、京都では、後または中ごろの扉から乗って前から降りるようになっている。したがって、料金の払い方も逆である。東京の客は、乗るときにまず料金を払い、後は好きなところで降りればよいが、京都の客は、乗るときに区間整理票を受取って降り際に乗車区間の料金を支払うのが建前になっているのである。つまり東京は料金先払い、京都は後払いということである。

この現象を極楽行きのバスの切符にたとえられている念仏について考察してみるとおもしろい。浄土宗の念仏は東京のバスである。極楽浄土への往生を願うならば、まずバスに乗るときに念仏という切符を先に買って乗るがいい。それが条件である。ところが、同じ念仏でも浄土真宗ですすめるのは、報謝のそれが主体であるから、京都風のバスのように、念仏は後払いでいい。だれでもバスに乗せてもらってそのまま浄土へつれて行ってもら

えるならば、こんなにありがたいことはない。自然に念仏は口をついて出てくる。つまり、降りしなに感謝の念仏を支払う勘定になる。

学問的にいうと、いろいろ難しい問題があって浄土宗と浄土真宗の教学的相異はなかなか理解しにくいかもしれないが、ごく俗っぽく大ざっぱにいうと、まずこんなところが両宗の念仏の大きな違いといえるのではなかろうか。

ところが、両宗の念仏のこういう微妙な違いについては、一般にあまり関心がなく、浄土宗の信者でも浄土真宗の門徒でも、単純に念仏といえば同じことと解釈している人が多い。単に念仏だけに限らず、宗祖についても行事に関しても、曖昧にしか理解していない傾向が強いのである。

例えば、開宗八百年を明年に控えた浄土宗と、宗祖の生誕八百年を今年迎えた浄土真宗と、どうして別々に記念法要を営むのか、疑問に思う人がいたり、知恩院も本願寺も同じ宗旨の大本山と信じている人があったりする。また、仏教術語の読み方にしても、各宗それぞれに長い伝統に基づく読み癖があるにもかかわらず、案外素人読みが幅をきかしていることが多い。雪山偈(せっせんげ)をセッザンゲと読んだり、厭離穢土(えりえど)をオンリエドといったりする類である。浄土宗開宗の年である承安五年をジョウアンと正しく読む人が少くなったことも悲しい。法然上人の主著『選択本願念仏集』は浄土宗ではセンチャクホンガン……と読むが、浄土真宗ではこれをセンジャクホンガン……という習わしである。これなど、チャクをなぜわざわざジャクと濁らねばならないのか、深い理由もないままに、宗派意識のなせるわざとしか考えられないが、もしそうだとすればずいぶんケチな根性というほかはない。親鸞という人は、師の法然を大師釈尊と仰ぎ、その法然に欺されて念仏を唱えて地獄に堕ちようとも悔いはない、といったほど純粋に法然上人に心酔した人であるのに、その末流である浄土真宗の人々が、選択集の読み方をわざと独自の読み方で通そうとこだわるのは、どうも解せない。しかし、今日、ともかく、仏教語が全般的に正しく受取られず、曖昧のまま巷間に流布している事実は覆うべくもなく、まことに情ない限りである。

これらのことは、まことに些細なことかもしれない。しかし、歴史の発表を顧みると、国運の非常の時は必ず肇国の原点に立戻り、それを鏡として反省するというやり方が日本の場合、特に基調となっているようである。

浄土宗八百年の歴史をふりかえってみても、宗勢の危機や宗運の衰えたとき、あるいは何かの記念の際には、必ず宗祖法然上人の昔を偲び、宗祖精神を基点として出直す形をとることが多い。反省の糧を宗祖に求め、宗祖の心に帰って現代にその精神を生きかえらせようとするのである。もし宗祖の心が長い間に誤解されたり曖昧に受取られて今日の人々に曲って伝承されているとしたら、それはこの際潔く改められねばならない。事の大小を問わず、宗祖はいつの時代でも宗祖であって、その精神はまっすぐ正直に受けつがるべきであろう。「跡を一廟に占むれば遺法あまねからず」というご遺訓は、どこまで守られてきたか。われわれ末流は、謙虚にそれを反省するとともに、曖昧に伝承されている些細な事柄にも心を配って、開宗八百年を機に、少しでも正しい祖語や祖伝の理解に努めるべきであると思う。

裏辻賢洲

（福岡県宗像郡福岡町大善寺住職）

今年は全国的に大変暑い毎日がつづき、三十度以上が六十日以上と言う異常気候でしたが、暑さ寒さの彼岸迄が来ると、朝夕めっきり涼しくなり、いよいよ秋と言う時期に入り、今年も残り少くなりましたが、来年はいよいよ昭和四十九年を迎えます。昭和四十九年、我々浄土宗徒にとっては忘れる事の出来ない意義深い開宗八百年の記念の歳が目前に迫りました。浄土誌から「開宗八百年と私」と言う事で、何か書けと言われましたので偽りの無い処を素直に認める事にします。

開八開八と十年前頃からやかましく言われて来ました

が、さて静かに身辺をふり返って見ると、之を迎えるについて末端迄の動きは何一つとして来ていないのに今更乍ら驚きます。末端寺院として、浄土宗から時々ビラが来たり、読んでもあまりパッとせず、多量の部数を申込んで配布でもしようかと思う様な気も全く起らないようなトラクト類が、申訳的に教務所、組長経由で思い出した様に来る位の程度で、何一つとして実のある実動が展開されてないのが、全くの実情の様に思われます。

九州辺りの末端寺院迄届いている事と言えば、その事については今日とやかくと論議する人もありますけど、ほんとうに信徒の処まで開宗八百年の事が届いている事と言えば、総本山知恩院の和順会館建設についての寄附目標達成をお願いしますと言う事一つで、他には何一つとして開宗八百年についての実のあるものは全く無いように見受けられます。

然し時日は遠慮なく迫って参りました。他力本願で待っていても適切な示教も果実も全く期待できませんのが、今日の浄土宗のなさけない実情と見受けますので、私は私なりに智慧をしぼってでも、折角意義ある開宗八百年を迎えるのに、無為に過すのは元祖様に対し全く申訳ない次第でありますので、私の寺では以下申し述べる様な事を今年早々から実動に移しております。

と斯う申し上げても、そんな事は自分の処では早くからやっておるつまらん事とお考えになる向もあると思いますが、それは真に結構な事で浄土宗万々歳です。

私の処では先の元祖七百五十年大遠忘の折は、記念事業の一つとして七間に十一間の本堂再建をやりましたので、此の度も総代檀家では庫裡客殿の再建をと申し出がありましたが、私は此度は建築の寄附は仰がないと言う方針で、一人でおさえ建物は知恩院の和順会館を建てると言う事に協力すると言う事で目標達示額の倍を納めさせて頂く方針でおります。

と同時に此度は拙寺の方は内容教化の方に重点を指向する事と致しました。幸い、たしか浄土宗布教師協会では、本年度は一枚起請文を布衍(ふえん)する事を布教の中心目標にされたとか聞いておりますので、この元祖様の御遺言を開宗八百年の記念として元祖様の原点に帰ると言う意味もこめて、私の寺でも今年は徹底的に一にも二にも一枚起請文一点張りにしぼり、本堂に於ける法要の際にも参詣者全員でおつとめの後、お奉唱し、亦檀家での年回忌の法事の折も之を皆で奉唱し、この線に沿った布教を徹底的に実行する事にしております。

と共に、亦私の処は博多と北九州の中間に在り、近年ベットタウン化がはげしく進行し新築の家がドンドン出来、之に伴い仏壇を新しく求める処が多く、所謂仏壇ブームを呈し、従って仏具商が右往左往するのが多い最近は「仏壇開きのお参り」に忙殺される始末です。之についていくら仏壇が美しくなっても、之にお参りする心の方が伴わねばなんにもなりません。そこで浄土宗の勤行式が、今日たくさん出ておりますので、之を殆んど取り寄せて検討して見ました。一長一短が夫々ありますが、只今のところでは京都の豊田愛山堂から出ている浄土宗信徒勤行式と言うのが、その内容体裁価格から一番私の気に入りましたので、之亦之一本にしぼり、之を普及する事に決め、一千戸の全檀家に「必ず一冊」をスローガンにして、着々と無料で記念配布すると云う事をすすめ、既に大半を終り年内に完了の予定でいます。

要するに、此度の開八を迎えるに当り、拙寺では記念事業的な外的な建築は本山のに極力協力させて貰う線に止め、むしろこの度は後世に残るものとして内的な一枚起請文の精神普及徹底とおつとめ本の、之亦徹底的普及と、之が実行を期して、来るべき開八を迎えたいと言うのが私の現在の心構えであります。

他愛もない事とお考えによる方もあると思いますが、私は之で宜しいと満足し、渾身の努力を傾け、いよいよ歳が明けて記念すべき昭和四十九年になったら、約百名の団参を連れて祖山の大法要に参詣し、元祖様の前にぬかずきたいと言の気持でおる昨今の心境であります。もう時間が無い、お互頑張りましょう。

（富山県新湊市専称寺住職）
藪内好禅

少年老い易く学成り難し、一寸の光陰軽んずべからず、未だ醒めず池塘春草の夢、階前の梧葉すでに秋声。これは私の大好きな詩であって、詩と言えばすぐこれを口にする程、親しい友達になりきっております。今も尚池塘春草を夢見て、心は実に若い方同様、熱血をたぎら

せている自分ではありますが、いつの間にか第四句の階前の梧葉すでに秋声を地で行く年齢になってしまった現在の私、静かに顧りみますと只感慨無量。外に何ものがあると言えるでしょう。然し人は年齢で云々すべきではない、要は熱意である。と、自分に常に言い聞かせ、人にも話して張り切っております。

今や開宗八百年を目睫にいたしておりますが、法然上人御一生の御苦労等、種々相をこまやかにおしのびいたします時、法然上人御出家の動機と私は異なり、曹洞宗の家に生れながら全く不思議な御縁でしかも周囲の反対をおしきってまで好んで浄土宗の尼僧になったのですから今にして思えば何たる果報者であろうか、と衷心喜び且非常な誇りとも思っております。一方浄土宗の宗侶となった以上、何としても宗祖のみ心に、より一層お応えいたさねば、と固く固く決意いたして今日ある訳であります。

開宗八百年開宗八百年と、全国津々浦々に至るまで、浄土宗の僧俗ともに、挙げてうたい文句ででもあるかの様にさわがしく口にしている様ですが従来都度の記念をこの度ほどには言っていなかったのであろうにと想像するにつけ、つくづく思いますに、現在の世相は法然上人御来世中と、時勢の姿こそ異なっても、世道人心の乱れは曽てなし、と言いたい位その極に達していると断言して憚りないと思います。法然上人は当時同様の渦中に居られました。にもかかわらず、恰も濁りに染まぬ白蓮華の如く、聖道諸宗が勢力を得ている中にあって念仏の標識を高々と打ち立てられた信念と勇気それに豊かな人間性が効を奏し草木が風になびくが如く、上は王宮から下一般大衆に至るまでその御化導に浴したというのに……と至らぬ身とは言いながらあまりにもなさけない……と己が怠慢の責を痛感しております。警鐘は全国至る所で乱打されているのです。折柄、打った響きに応ずるが如く、浄土宗の青年会が全国的に結成され、「若き日の法然たれ」と人間浄化、社会浄化の雄哮びとなって躍動されつつある事は全くすばらしい事と喜んであります。

私共老年者と雖も、一宗の為には不惜身命の覚悟で奮起するにいささかもやぶさかであっては宗祖に対し申訳が立ちません。就中、私共尼僧としては、半生を子の母として一身を献げて悔いぬ世の御婦人方に接する機会が頗る多い事でもあり、婦人教化に本腰を入れて起ち上るべきで、私は私のモットー「念仏は心の闇を開く鍵」で対機布教に専念し教化展開に只管とり組んでおります。

特集　開宗八百年と私　（中）

御婦人方は子の為には「忍ッテ終ニ不レ悔イ」である。これに信仰が先立っていたら恐らく今日の乱れは少くも五十パーセントはくいとめ得たであろうものを……と或は夢の様な事かも知れませんが、しみじみ思うのです。子の教育は胎教からはじまるのですもの。法然上人はかの有名な大原問答で念仏する事は何ものにも勝るという事を、一、万機普益の故に。二、称え易きが故に。三、万徳円満の故に。四、たもち易きが故に。五、時にかなうが故に。と五つの理由をお挙げになって、きら星の如く居並ぶ諸宗の碩学を信伏せしめられたのであります。

この様な次第をも経て立派に御開宗なされてから八百年。これを機に慶讃大法要をするも可。記念事業も亦大なる意義がありましょう。然し、私に言わしむれば、須らく如何なる人も喜んで念仏を唱え、念仏裡に日々を送る様いたすのが宗祖の本旨ではないでしょうか。大日比の漁夫達が浜で魚の網を引く時も南無阿弥陀仏と申される位、念仏が大日比の土にまでしみ込み、子供に至るまで拝み合いの明るい生活をして居られるとか、全くうらやましい限りです。法然上人は、「行住坐臥に時節の久近を問わず云々」とおっしゃっていらっしゃいます。いつ如何なる時でも念仏を称えれば即自利となり、それが自ら利他ともなる事を思うにつけても申さずにはいられない筈。申せば必ず得る所があるのですもの。「仏法の大海には信を以て能入とする」ともいわれております通り。とにかく信じて称えるが勝。たとえ自分一人でもの意地で実行に移されていたらそのうるわしい姿にどうして感動せずにいられましょう。どうして次々波生せずにおきましょうか。

念仏の清流が流れ流れて八百年。この記念を契機にお互一人一人が希求して止まぬ明るい和の世界をつくりますための易行易修の念仏です。食物でも食わず嫌いをしていては営養不足をまぬがれません。食してこそ始めてその味わいを知る事ができるのです。それと同様、称えて始めて念仏の有難さがわかるのであります。

御法語に導かれて

北村謙順
（神奈川県足柄上郡西念寺住職）

「いかなる弥陀か　十念の悲願をおこして　十方の衆生を摂取し給ふ。いかなる　われらか六字の名号をとなへて三輩の往生を　とげざらん。永劫の修行は　これたれがためぞ。功を未来の衆生にゆづり給ふ。超世の悲願は　又なんの料ぞ。心ざしを末法のわれらにをくり給ふ。」

登山状

この九月の始めに、大正大学在学中の浄土宗の学生の方々が、凡そ百名程、実践仏教ということで、鎌倉の大本山光明寺に参られまして、白衣に黒衣如法衣を着して、勤行と礼拝念仏の修行の日を数日送りました。まことに有り難い姿でありまして、参拝者の中には、渡廊下を本堂に向うこの若い人々の列に合掌していた人々もありました。この方々は、将来宗門をにない、念仏の法灯を伝える人々であります。不退転の精進を祈らざるを得

ません。求められるがままに、この方々に少しばかりお話を申し上げたのでありますが、要するに、〝念仏すれば往生する〟という実証者になって頂きたいということでありました。

私共は生涯をかけて学問もし、知識も求めて研鑽怠りなく参りたい。が結局するところは、一枚起請文で宗祖様が最後に訓されたところの〝唯一向に念仏すべし〟というところに帰着するためなのだ。この一言が自分にもはっきりと云える人間になるということであるというようなことを申し上げたように思うのでありますが、もとより実際には容易ならぬことであります。ですけれども、これがはっきり分っておりませんと、「念仏や失はんずらん」ということで、頭ばかり大きくて中味が無いということになると大へんなことになります。何故かと申しますと、宗教というのは所詮は知識ではなくして、実証体験のものですから、千万言を費しても遠い場合もあるし、一言でズバリということもある訳です。

自信教人信とあるように、自ら信ずることが、そのまま人々を信ぜしめることに連るものであります。一般の方々は、夫々職業をもち、それについては、専門家であっても、さて、生死苦悩という人間についてまわる大問題に関しては、大方はまず何の手がかりもないと申せましょう。そこで、誰が之を安住せしめ、誰が之を実証するのかと申せば、それが宗教家の責任ということでありますが、その決定心をどう獲得するかということで、まことに苦労をするのであります。

さて、そこで御法語に入るのでありますが、これは、その宗祖様の決定心が、力強く、私共の胸を打つお言葉でありまして、登山状という有名な御文章の一節であります。折を見て是非全文をお読み下さい。この部分は、一口に申しますと、「他力」の真実を簡明に述べられたものであると受け取れます。他力が肯けたら念仏の信は決定するという大事な事柄を含んでおります。ところが、これがよく頂けないのであります。何故念仏申したら助かるのかよく分らないのが、実際上の私共の悲しいところなのであります。自力の信にたよりたくて、他力の真実に転回できない私共であります。それならば実は宗祖様の浄土御開宗の意味も分らないということになるのですから、念仏の徒、浄土宗徒としては大へんなことなのであります。

かの浄土開宗の文と申す、一心専念の文では、どこが大事かというと、最後の「彼の仏の願に順ずるが故に」というところで、特に「故」の一字を昔から非常に大事にして参りました。つまり、仏願に順ずる道が、浄土宗となったのであります。そこで御法語ですが、その悲願は何のために起されたのか？　と宗祖様は問題を私共に提起されるのです。その答として、末代の衆生のためであると。つまり私共のためなのだということです。次に、仏の永劫の修行は誰のためかと問われる。未来の衆生のためであると。是れも亦、私共のためにということである。その仏は願をおこし修行して下されて、念仏往生の願を成就されたと。この十声一声の念仏に仏の救いが決定するという弥陀が他にどこにおられるか。どこにも他には在さぬと。それならば、われらがその仏の六字の名号を称して、どうして往生しないということがあろうか。という、力強さに満ちた決定のおことばなのであります。

この登山状の少し手前に有名な文章があります。「その衆生の業力によりて（自力）むまるるというはかたかるべし。われすべからく衆生のため永劫の修行ををくり……その成就せんところの万徳無漏の一切の功徳をもってわが名号として衆生にとなへしめん。衆生もしこれにおいて、信をいたして称念せば、わが願にこたえてむまるることをうべし」と。その内容を明らかに示されてあります。すべからく衆生のため　という所を、冒頭の御言葉は更に深く示された部分に当るのであります。

そこで、まとめてみますと、私共が何故念仏申したら救われるのか。それは仏の願に順ずるが故である。その仏の願というのはどんなものか。末代一切の衆生のためである。それは何故なのか。私共は畢竟この身に於ては生死苦悩を解く力を持てなくなっているからだ。自らの力では、究竟して安住するものを持たず、苦海に流転している身であるからだ。実はそれが娑婆というこの世の実相であって、この世にも楽しみはあるが、それは一朝の夢の中のことであって、吉凶相受け苦楽相つぐものにすぎない。宗祖様は登山状に、或は金谷に花をもてあそんで春の日をおくり、南楼に月をあざけって秋の夜を明かす、と述べておられますが、所詮は、その花客にも無常の風がふき、楼主にも生死の露はおちるのであります。かくて、空死空生の実態から誰が救出して真実の楽

果を与えんとするのか。諸仏菩薩雲の如く尊く在すとも、この私共衆生のために泣いて心を向けたもうものが阿弥陀仏であります。されば、私共凡夫のために、阿弥陀仏は在さねばならないわれがあるのであります。本願のいわれが成立するのであります。私共が在ることは、そのまま仏の本願があることになり、仏が在すことになるのであります。

登山状の末尾に参りますと、次のようなご文章に出あいます。

「われらが往生は、ほとけの正覚により、ほとけの正覚は、われらが往生による」と。

たいへんうれしいお言葉ではありませんか。私がいるので仏様がおいでになるのであり、仏がおいでになることは、この私がいるからだ、ということになるのであります。

親鸞上人が、〃弥陀の五劫思惟をよくよく按ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり〃と歎異抄に申された御信境もよく肯かれるのであります。

まことにありがたいことには、ここまで参りますと、私共の一切は落着いたしまして、この外に何も云うこともなくなるのであります。何か申すとすれば、すなわち南無阿弥陀仏と申すばかりということであります。

この導きは、宗祖様によって開かれたものであります。これが浄土御開宗の大いなる意義でありましょう。これが開かれる底には、宗祖様の涙が光っており、それがそのまま仏の涙として語られているのであります。宗祖様は申すまでもなく九歳で父と死別し、十五歳で母と別れ、そのご生涯は出発から御苦労多き人生でありますが、その自分の遭遇された人生苦難の体験は、又、衆生一切の苦労の姿と不即不離になるところが、実は宗祖の涙でありましたし、宗祖様の宗教的人格の尊さであります。時代は藤原氏の栄華の衰れさ、保元、平治を中心とする醜悪なる人間世界の現出、相続く天災飢饉による庶民の生活苦と動乱の渦巻に苦悩する暗黒の様相をみる時、自己を含めた一切苦悩の衆生のために、真実に光明あらしめるものは、この仏の本願に誓われてあることを釈尊が説き遺したまえる念仏の道より外にはないという決意が、宗祖御開宗のお心でありましょう。それは、他力門という大いなる開門であります。私共なりとも、〃ここにいながら極楽の聖衆の数に入るぞうれしき〃安らぎとよろこびの生活が展開出来る新たなる出発であったのであります。

合掌。

選擇集講話

第九章　四修法篇

四つの念仏生活の心がまえ

真野龍海
（大正大学梵文学教授）

前章では、浄土宗の信仰の要めともいうべき三つの安心の説明があり、これにつづいて、本章では、その安心を得たものが念仏生活で、どのように心くばりをするべきかということについて、四修――四つの心がまえ――を説かれております。一枚起請文にも、「ただし三心四修と申す事の候は、皆決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと、思ううちにこもり候うなり」と説かれておりまして、ただ南無阿弥陀仏すればよろしいのですが、念仏生活を、より正しく強く行うために、さらに四修を理解し、実践することが大切となってきます。

そもそも四つの修という修とはどういう意味でしょうか。修とは修習といわれ、数々修習と解するもので、なんどもなんども、数を重ねて反覆し、くりかえし行って、ほんとうに自分のものにするため、生涯をかけることを言います。

そこで『選択集』の説き方からしますと、浄土三部経の文が各章の冒頭に引かれるのが例ですが、この章では、善導大師の『往生礼讃』によって四修が説明されます。

「一には恭敬修。所謂彼の仏、及び彼の一切の聖衆等を恭敬礼拝す。故に恭修修と名づく。畢竟を期となして、誓って中止せざる、即ちこれ長時修なり。

二には無余修。所謂専ら彼の仏名を称して彼の仏及び一切の聖衆等を、専念、専想、専礼、専讃して、余業を雑えず。故に無余修と名づく。畢命を期としこれ長時修なり。三には無間修。所謂相続して、恭敬礼拝し、称名讃歎し、憶念観察し、廻向発願し、心心に相続して、余業をもって来し間ず。

故に無間修と名づく。又貪瞋煩悩をもって来し間ず。随犯随懺して、念を隔て、時を隔て、日を隔てしめず。常に清浄ならしむるをまた無間修と名づく。畢命を期とし……これ長時修なり。」

ここに、善導大師は一、恭敬修、二、無余修、三、無間修、そして、それぞれの終りに説かれて結ばれている。四、長時修とを、四つの修としてあげられ説明されている。この中、恭敬修とは、彼の仏、つまり阿弥陀仏と、その聖衆すなわち浄土の観音、勢至、二十五菩薩等々の方々、などを、おのれを空しうして心から敬まうことを修するものである。次に、引かれている『西方要決』には、この恭敬修を五つに分けて説いている。(1)阿弥陀仏、諸菩薩方を敬い、そのまします西方浄土に向っては、涙、唾、便などの不浄をしないように気をつけるぐらい念頭においていなければならないこと。法然上人の弟子となった熊谷入道直実は、東国へ行く時、馬に後向きに乗って、西方へ尻を向けないようにしたという。どうしても西になる場合は、西でない方へという心づもりで行い、敬いの心を忘れないようにするのである。

(2)阿弥陀仏に関係する像や、経典類を敬うこと。像では、とくに、阿弥陀仏と観音・勢至二菩薩のいわゆる弥陀三尊の像が敬う対象であるが、木像、石像、画像等すべてである。弥陀三尊を梵字で示す種子も同じであって、弥陀はキリク、観音はサ、勢至はサクで表わす。先般、九州の観世音寺の境内で、鐘楼の前を通りすぎると、数本の立木の間に、三尊の種子を刻した石が、ひっそりと星霜に古びた姿を見せていた。寺を訪れる人は多くとも、礼拝する人は稀であろうと、しばし佇んだことである。近年、葬祭は、ばかに派手になる一方であるが、広大にしつらえられた葬儀の会場に仏像の姿のないこともしばしばある。業者にまかせると、本堂で行う時でも、御本尊に幕を張り隠してしまうのがあるが、感ちがいをしているのではないかとも思う。しかし、そのような時でも位牌の戒名の上部には、かならず阿弥陀仏の種子のキリク文字が書かれているので、阿弥陀仏に帰命し、西方浄土への往生を願う式の意義が、かろうじて形に表わされることになる。だが、同じく、そのような意味で礼拝する人は稀であ

ろう。いずれにせよ、弥陀三尊とくに、弥陀のキリクは心に留め、仏像等と同じく敬うべきである。

経典とは、浄土宗で依り所とする『無量寿経』、『観無量寿経』、『阿弥陀経』の三部経、その他である。粗末に取り扱ってはならないのであって、読誦の前後にはおし頂いて敬うのである。

(3)次に、浄土教に縁のある先達、先師を尊び、別の教の人でも敬うようにしなければならない。

(4)信仰を同じくするいわゆる同行の人々を敬うこと。これによって、じぶんひとりだととかく怠りがちな信行も、相助けられるものであるから、お互い保護しあい、尊重しあうことが大切である。

(5)仏・法・僧の三宝を敬うこと。とくに、ここでは現在我々の目にすることのできる仏像類と経巻類と僧侶方への敬いが説かれてある。それらを通して、まことの仏と、まことの法とを拝むことが心の奥底にあることはもちろんであるが、木片、紙片の像と軽んずることなく、真の仏身に接するように誠を致すのであります。

次に第二の無余修は、ひたすら阿弥陀仏の御名を称えることを中心として、余業、つまり、念仏以外の信仰のまぜものをしないことであります。人によりますと、いかがわしい神様を信じたり、たたりを信じたり、姓名判断や、方位などにこだわる俗信を鵜呑みにしておられる人があります。南無阿弥陀仏を称えることは、何にもまさる力であり、仏の光に守られているあかしであります。この法門は、二千年もの間、絶えまもなく、無数の人々を支えて来たものです。上人「つねに仰られける御詞」に「本願の念仏には、ひとりだちをせさせて、すけをささぬなり。すけというは、知慧をもすけにさし、持戒をもすけにさし、道心をもすけにさし、慈悲をもすけにさすなり。」とあるように、念仏の前には、助けを必要としません。信仰は純粋であるべきです。

法然上人は、大蔵経を五返も読まれたといい、智慧第一の名を得られたにもかかわらず、それらのすばらしい学問を、すべて捨て、専ら念仏を選び取られたのでありました。しかし、人間たるもの、とかく、学のあることを見せがちのものであります。ところが、法然上人の御法語類を拝読して感ずることは、そのような念仏の教を立てられるまでの学問や知識を使っての御話が一つもないことであります。念仏の教を弘められるようになっても、上人は「われ聖教を見ざる日なし、木曽の冠者、花洛に乱入のときただ一日聖教を見ざりき」と言われ、仏教の難かしい学究は絶やされなかったにも

阿弥陀三尊種字

かかわらず、念仏一すじの道を、歩まれ、歩め、と指導され、余計なこと、学問すら、「学生骨になりて念仏や失わんずらん」といって、念仏以外の道を警しめられたのです。私共は、念仏に、純粋に生きるべきであります。

第三の無間修は、念々、日々に、南無阿弥陀仏の正しい行を絶やさず、その間を、他の信仰や、煩悩などに、入りこまれ、念仏生活に切れ目の出来ないことをいいます。俗に、想い出すよじゃ惚れようがうすいといいますが、ほんとうに恋しあい親しみあっているものならば、二日も三日も念頭に浮ばないで、たまに想い出すというようなことはありえません。折にふれ時にふれ念頭にありましょう。念仏行者は、日々念仏によって相続されていきます。想い出したように、お念仏ということは、念仏者としては恥かしいことです。私共は、多忙な一日を送ります。しかし、朝に礼拝、念仏し、一日の業に出発し、夕に感謝、もしくは、反省、懺悔の念仏となって、一日が、念仏でしめくくられます。一日の中で、はっきりいって、全く念仏のない時があっても、前後は、念仏で一つの流れとなるわけです。その流れにある以上、念仏のない時でも、その人の働きは、知能は、情感は、一日中念仏者のそれであります。

上人は「たとい余事をいとなむとも、念仏を申し〳〵これをするおもいをなせ。」といわれ、一日の中の仕事、食事、休養も、この「思い」によって営まれることを注意されております。

『法然上人行状絵図』第二十三巻には、信者の間に、次のような説明をされています。

——たしかに、「念々不捨者」といって、念々に仏のこと

を忘れず称えるべきです。しかし、ふつうの人は、平常は、見るもの、聞くものに心が移るものですから、多忙に紛れる時は、念仏はむつかしい。数珠でも常に持つようにしたら仏を念ずる心があると思います。たとえ、何か障害があって、その心が欠けたとしても、あああさましいことだと反省されれば、それが、心に仏をかけることになるのです。いずれにせよ、忘れずにいることは、「相続」なのです。――

というように、陰に陽に、仏を念じ、念仏が欠けたり、忘れても、また念仏に立ちもどり〳〵しながらの相続、つまり無間を教えられています。

第四の長時修は、畢命、つまり、命終まで一生止まることを知らない念仏専修であります。上人は、「信をば一念にむまると信じ、行をば一形（＝生）にはげむべし」といわれています。もともと、これは、自力聖道門では三大阿僧祇劫という無限の時とされますが、その意味は、永遠に、もうこれで悟った、救われたということはありえないのであって、生命のあらんかぎり修行するべきであると考えられます。したがって、前の三つが、当然念仏者の身心のかまえである以上、生涯をかけてのことでありますから、それぞれ、三つの終りに、長時修が付してあるわけです。

このように、四修は、四つですが、なかでも、法然上人は『往生要集料簡』などで、無間修を要めとされております。『一紙小消息』でも「行は一念十念むなしからずと信じて、無間に修すべし」とあります。

なお、この第九章の四修は次のように『往生礼讃』、『西方要決』、上人の私釈では、多少、順序が異っておりますが、浄土宗では、上記に説明した順の『往生礼讃』の四つの修（四修の言葉はありませんが）によります。

『往生礼讃』(1)恭敬修
(2)無余修
(3)無間修
〔(4)〕長時修

『西方要決』(1)長時修
(2)恭敬修
(3)無間修
(4)無余修

法然上人私釈(1)長時修
（恵心に同じ）(2)慇重修（＝恭敬修）
(3)無余修
(4)無間修

念仏人と歴史

関通上人

大橋俊雄
（時宗文化研究所）

一

徳川氏が江戸に幕府を開くと、浄土宗は香華御宗門として、その地位を高めてきた。家康は姓を徳川と改めたが、父広忠以前松平氏を名乗り、三河国に住していた。三河国にいた当時の菩提寺は、松平の高月院・岩津の信光明寺・岡崎の大樹寺で、ともに浄土宗にぞくしていた。そうした関係で、二代親忠の五男超誉存牛は僧となり昇進して知恩院の住持となったが、安城の戦いのとき貫木を力いっぱいふるい、家康の危急を救ったのも大樹寺の住僧登誉天室であった。家康には日課念仏と呼ばれている、南無阿弥陀仏と一紙にたくさん名号を筆で書いたものが残されている。いかに浄土宗に、念仏に心をよせていたか知ることができよう。天正十八（一五九〇）年江戸城に入った時には、貝塚称名院を増上寺と改め菩提寺とした。将軍が浄土宗寺院と寺檀の関係を結べば、次第に大名や旗本も帰依して、寺院の数は増加し、経済的にも安定してくる。その結果、積極的に修行し教化するといったことを忘れ、香衣の色にほこり、紫衣や紬衣を得たいと願う僧もでてきた。無欲枯淡であるべき僧、生者を相手に法を説かなければならない僧は、法要とか葬儀をとうして死者を相手にし、修行を忘れ、高座に安住して、般若湯の名のもとに酒を口にし、天蓋だ、脇差だ、草鞋だといっては、たこ・さんま・いかを寺院内にもちこんだ。女子を大黒さまだといって住わせた僧さえいた。こうした仏教を批判し、本来のすがたにかえそうとしたのが、忍徴・関通・徳本といった捨世派の人たちや、徳巌・普寂・敬首という興律派の僧であった。

二

関通は、尾張国海西郡大成村（現津島市）に、元禄九（一

六九六）年四月生れた。はじめ真言宗の寺に入って僧となったが、できることなら浄土宗の寺に入りたいと願い、十三歳のとき改めて中一色の西方寺、照誉霊徹の門に入り、名を専阿と改めた。その後十六歳の時、年来の望みがかなえられて江戸に下り、増上寺の学寮に入ったが、そこでの勉強ぶりは異常であった。もちろん学寮であるからには師について教えを受けるのは当然であるが、ひまさえあれば本を読み研究した。それは早朝から夜におよんだ。そのため人呼んで、雷専阿といったという。

学問の鬼ともいうべき専阿の態度に人びとはおどろいたが、そればかりでなく日課念仏一万遍を誓った。一口に一万遍といっても、一秒で南無阿弥陀仏と一遍となえたとしても、一分間で六十遍、一時間に三六〇〇、一万遍を成就するには三時間は必要である。江戸にいたのは十年ばかり。国元に帰るにあたり名を関通と改めた。生死輪廻の関所を通過するには念仏よりほかにはない。念仏こそ関所手形である。この世に生れ浄土の法を学び、念仏を修することのできた喜びをかち得たからには、日夜念仏を怠ることがあってはならない。念仏さえとなえていれば、どのような関門であっても通れぬはずはない。この上は関通としたいというのが、その意図したところであった。しかも、彼は「南無阿弥陀仏とは因行果徳のあらゆる功徳を、皆ことごとくつつみおさめたるなれば、一字欠略すれば無量の功徳を欠き、一声訛声すれば無辺の大利を失うになるなり」といい、念仏を早く多く申さなくてはならないといっても一語一語をはっきり、ナムアミダブッと称えなければならない。略して称えれば浄土に往生したくても往くことはできない。十遍多く称えるよりも、一遍の念仏を大切にせよ、「六字分明に聞けるやうに称ふべし。ゆるがせにすることなかれ」と繰りかえし説いている。

三

関通の住していたのは、尾張国中一色の西方寺。一人出家すれば九族天にのぼるといって、尾西の農家ではきそって出家させた。出家すれば祖先の霊を弔ってくれるとはいうものの、口べらしの意味もあったらしい。西方寺にも、その例にもれず僧になりたいといって訪づれてくる人がいた。ただでさえ財宝の乏しい西方寺のこと、二粥一飯＝三度の食事のうち二回は粥であった。一人の僧がくれば、またそれだけ食をつめなければならない。それを承知で迎え入れなければ、いざこざがおきる。そこで弟子たちを招き「入衆させてほしいといって来ている人がいる。もし入衆するとすれば、二粥に水一杓を増すことになるのだが。それでも弟子入りさせてよろしいか」、それでもよいということになれば入衆を許した

という。常の食事は、稗・大豆・米・麦をまぜたものの中に、行乞で得て来た大根とか干菜といったものを一諸にまぜて食べたが、それは遠来の客であっても特別待遇するということはなかった。布施にたよっていた関通にとって、その日の食事の量はちがう。もし余れば大豆・小豆を入れて握り飯をつくり、近所の子供たちに分け与えてやったという。

また郷内に殺生する人があれば、その人を呼びよせ、こんこんと殺生することのよくないことを教えた。不殺生戒を犯せば極楽浄土に生れることはできない、仏になれないと説いたのである。そればかりでなく、お金をあげ魚と交換して念仏すべきことをすすめた。こうして次々に、その土地にある釣具などの殺生に必要な道具を買っては焼き捨ててしまった。もはやこうなれば殺生することもできない。殺生ばかりでなく、肉食もしなければ魚肉も口にしない土地になってしまったという。

そして常に珠数をもて、持って田畑を耕すことができなければ、腰につけるなり首にまけと教え、町家の商人には袂に入れておくようにいった。職業によってじゃまにならないように、しかも手の届くところにおくようにすすめたが、それは目に見、手にふれれば自然念仏も出やすいというのであった。念仏を称えること、念仏申しやすい環境づくりをすることが関通の信念であり、実践道であった。西方寺に住していた十年のあいだ、特に寝床を敷くこともなければ、夏蚊帳さえつらない。昼夜を問わず念仏を申しつづけ、疲れれば柱にもたれかかってまどろむといった生活をつづけた、勇猛精進の人でもあった。

四

関通は、延享元（一七四四）年『和字選択集』五巻をつくって、一般の人たちに頒け与えた。漢文では人びとに親しみにくい。『選択集』は法然上人が書かれた浄土宗の宝典である。ありがたい教えが書かれている。私が生涯を通じて説いてきた教えは、ここに書かれていることをもとにしている。だが惜しいかな漢文。この教えを親しみやすくするには和文でなければならない。一人でも多くの人たちに読んでもらいたいということで、『和字選択集』を出版した。明和七（一七七〇）年二月没するまで、持戒堅固に一期七十五年のあいだ席のあたたまるひまもないほど、各地で請われるままに説法したり、念仏を称えつづけた専修念仏の行者であった。世に関通型と呼ばれる丸味をおびた屋根をもつ堂宇や仏具があるが、それは関通上人の考えだされたものであるという。角のとれた丸味をもつ女性的な仏具、念仏者らしい温和な心づかいが、そこに見られる。

＝新刊紹介＝

玉山成元校訂

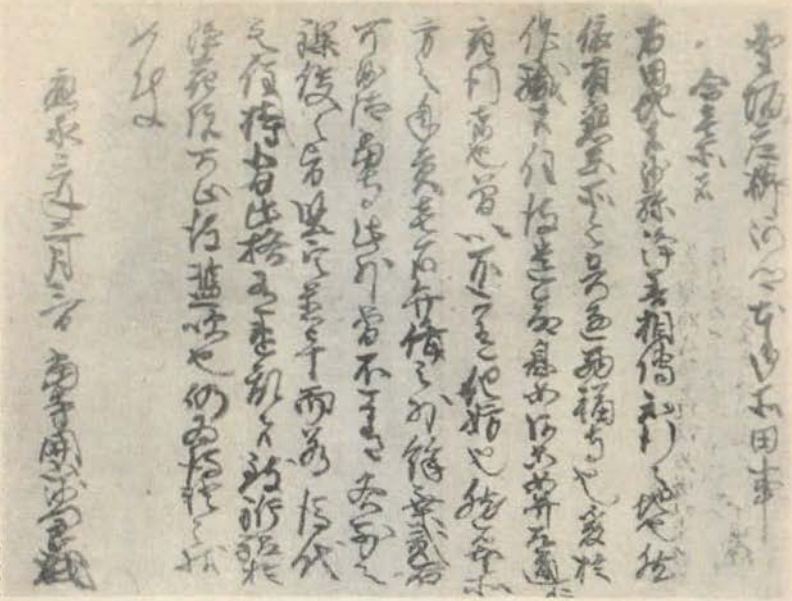
『西福寺文書』

大正大学教授玉山成元先生が『西福寺文書』を校訂され、続群書類従完成会から刊行されたことは近来の慶事である。玉山教授は多年高柳光寿博士について学問の厳しさを学ぶとともに、浄土宗関係の史料蒐集に専念し、良質の史料をふまえた論文を次々と発表し、学界の注目をあびたことはいうまでもない。西福寺文書も早くから研究されたものの一つで、玉山教授ならではの綿密な校訂が施こされ、素人でも読めるような配慮がなされており、私たちは安心してこの文書を読ませていただくことができる。

『西福寺文書』は中世史の研究、とくに仏教史の研究には欠くことのできない良質の史料である。敦賀市西福寺は北国第一の名刹で、応安元年（一三六八）八月、良如智水が後光厳天皇の勅願所として創建した。明徳元年（一三九〇）崇光上皇、文安二年（一四四五）後花園天皇の勅願所、応永三十年（一四二三）足利義持のとき、永享二年（一四三〇）同義教のとき幕府の祈願所となり、一時は塔頭が二十、末寺五十余を数え、北国浄土宗の中心寺院であった。織田信長、滝川一益、大谷吉継、結城秀康、松平忠直らの援助もあり、近世に入るといよいよ寺勢がたかまった。

本書に収録する古文書は、文保元年（一三一七）七月六日付の山内資綱置文から、寛永五年（一六二八）十月二十三日付の京極忠高の禁制に至る二八六通、それに「大原山縁起」一巻である。中世寺院の成立と発展の過程をはじめ、融通念仏と浄土宗との関係、武家と寺院の交渉、さらに土地制度、とくに室町時代における在地構造を明らかにする史料として、きわめて重要なものである。

歴史の研究には、何といっても良質の史料を使用することが大切である。従来は各宗とも縁起や伝記あるいは教義面にのみ力を入れ、歴史的な面をおろそかにしていた。宗門にとって教義は大切に相違ない。しかし、だからといって歴史的研究をおろそかにしたのでは、まったく片手落ちである。教団は教義のみで発展するものではなく、そこには各時代にお



開山良如置文（西福寺文書）

ける僧侶の献身的な活躍があったことを忘れてはならない。その事実を明かし未来に進む教団の方向づけをするのが歴史である。しかし、この歴史的研究のもっとも基礎になる史料の蒐集・校訂・刊行という仕事は並大抵の苦労ではない。そこには広い知識と豊富な経験、さらに長い時間が必要である。とくに仏教関係のものは、より以上の労力と経済事情がともなってくる。だから、つい遅れがちになってしまうのかもしれない。しかし、近来各宗門が目ざめ、この難事業の完成に手をつけはじめている。このたび玉山教授が開宗八百年を記念して刊行されたことに、惜みない賛辞を与えてよいと思う。とくに宗門としての刊行でなく、中央の老舗続群書類従完成会から出されたという点において、私は喜びをかくしきれない一人である。刊行を喜ぶ一人としてご一読をおすすめしたい。

（S・T）

A5判上製函入。全一冊　二四〇頁。
定価　三、五〇〇円

東京都豊島区池袋二―一〇〇八
発行所　続群書類従完成会
振替　東京　六二六〇七

異僧真覚

第二十一回

柴田六五郎
（滋賀県近江八幡市在住）

墓地の入口には何処でも六地蔵を祀るが善住寺にはこれが無い。「地蔵さんも彫らねばならぬ」石屋に和泉砂岩を注文した彼は儀規を調べた。六道を輪廻して苦しみ呻ぐ者達を救うと云う地蔵菩薩は

地獄道—大定智悲菩薩
餓鬼道—大徳清浄地蔵
畜生道—大光明地蔵
修羅道—清浄無垢地蔵
人　道—大清浄地蔵
天　道—大堅固地蔵

の六躰である。春の陽溜りの中でコツコツと石鑿を当てつつ彼は、曽束の作平の庭で刻んだ天ケ瀬観音の石柱と作平の墓を想い出した。既に四十年の歳月を経た忘却の渕から妙春の、いや天ケ瀬観音の面影が髣髴と浮び上った。観音は静かなほほえみと澄み切った眼差しをもって彼を見つめているようである。五尺と三尺の台石に更に一段を重ね、寺の山号養老山を彫り込み、笠石をのせた六地蔵は門を入って直ぐ右手に祀った。此処は又墓地の入口でもある。六地蔵の側面に偈を刻し

以偈讃曰

新奉彫刻　地蔵菩薩　若残一人　我不成仏
恭奉安置　香華□□　現世所求　皆令満足
得十種福　除八□怖　後生仏土　得無生忍
或此菩薩　現種々□　登山有情　斉成仏道
遊化六道　済度衆生　悉引経文　永遺累世

若有重苦　我代受苦
見躰聞名　当生浄土　――　天保五年三月廿六日
願主　当山主
真覚　敬白

真覚自像

「現世所求、皆令満足だな。その為には祈願の場所を造ってやらねばならぬ」何度か彫った守本尊を彼は又彫り始めた。子歳の守本尊千手尊からはじまり戌亥の本尊阿弥陀に至る八躰。火と水の神愛宕大神と跋難陀難陀の竜王。智慧の仏といわれる虚空蔵菩薩。四天王。正面には地蔵菩薩を厨司に入れて安置した。何れも台座共五六寸の小像ではあるが、此の十六躰を彫り、彩色を施して一坪余りの守本尊堂に納めるまで凡そ二年を要した。

門を入って此の堂迄六間(けん)余りの庭に、近所の子供達に手伝わせて拾い集めた石を敷きつめて石畳を造った彼は、

「これで下駄の歯形もつかぬわい」

と玄関に掲げた制札を見上げて笑った。

仕事は際限がなかった。前々から案じていた本堂の天井は痛みが愈々ひどく、端の方から垂れ下って来た。いくら器用な彼でもこれは手に負えず、大萱の大工伝四郎に頼んで張り替えたが、又々例の如く

為深田清次郎先祖代々菩提
天保八年九月廿六日
当天井張替　施主真覚

と板切れに墨書して天井裏に納めた。工事を終ると此の伝四郎にすすめて自ら薬師如来日光月光の両菩薩を彫り、これを寺に寄進せしめ、篇額を添えて諸仏殿の一角に奉安したが、これも同年同月同日拝書と記している。

七十四歳を迎えた真覚は網膜に霞がかかったように感ずる日が多くなった。「疲れたかな?」そんな日は終日念仏を誦

してすごした。仏前に瞑目して念仏を唱える事は、昼夜倦むこともなく彫刻、仏画の揮毫、寺の修繕等に身心を励まして来た彼にとって正に安楽境であった。

しかしそうして眼を休めてみても霞のようなものは一向に取れなかった。「俺も歳だな。お浄土も近いぞ」過去帳の末尾に遺言を認めることにしたが、妻子は勿論、資産とて有る筈もない彼の遺言は、墓碑銘に刻した如き自己反省と、上求菩提下化衆生の祈念以外には何物も無い。『偶成』と題する一偈と数首の道歌を認めた。

○しかばねの踊りを見てはほかでなし
　　此の身の上とおどろきにけり

○としよりも若きもともに
　　阿弥陀三昧するがよいぞや

八十歳の九月二十二日には斯う認めた。二十六日を弥陀来迎の日と心に決めている彼は霞の愈々深くなった老いの眼をしばたたきつつ筆を運んだ。だが此の年の待望の日も空しく過ぎた。

「俺の眼もこんなに疎くなってしもうたのか。これでは何時盲になるやも知れぬ」自身の墓石の側に立った彼の眼にはもう比叡の嶺も、比良の連峯も見定めることは出来ない。彼はその後の籔を潜りぬけた。真正面に牛尾の山が夕映えの中に山際を浮かばせているのが朧気ながら感じられる。その左手に連なる喜撰の峯は既に夕靄の中に没している。

「喜撰の山の下に妙春、いや天ヶ瀬観音と作平の墓があるがもう見る事も参る事も叶わぬ。じゃが、墓に参れずともやがてお浄土で逢えるやも知れぬ。噫々そうじゃ、俺は永い間彼等の菩提を弔うておらぬわい。これから命終の日まで毎日一万遍の念仏を手向けるとしよう」

その夜から彼は日課六万の念仏に更に一万遍を加えた。

「釈尊も元祖法然上人も八十歳で御入滅。俺は祖師方より二年も永生きじゃ。いや生き過ぎじゃ。俺のような何の役にも立たぬ鈍物の法賊が八十二歳とは。今年こそはお迎えを頂かねばならぬ。しかし何も彼も如来様まかせじゃから俺の思う通りにはならぬが」

二月の末に彼は再び過去帳の末に書き加えた。

金五両也
　右は愚僧葬式の入費也
米一石
　右其節の飯米也

米一石

九月廿六日を愚僧の命日と定むその節の入用也

安堵と空ろな気持が交錯し、霞む眼の中で筆が震えた。だが彼の待ちに待った其の日も空しく過ぎて又年が改った。少しづつ購入したり、書写した彼の蔵書は二百冊を越していた。

「これは俺の頭を剃って貰うた万福寺さんへ寄附するとしよう。未だ若い竟山院主が例え一冊でも使うてくれたら御恩返しの万分の一にもなろう」

そうつぶやきつつ本箱の扉の裏に寄贈の旨を認めたが、念の為にと改めた引出しの中から出てきたのは、その昔大蓮寺で写した妙春の裸像である。

「如意輪さまじゃな。いや未だ観音様になる前の姿じゃ。はあて、どうしたものじゃ」

思案のあげく彼はこれを糊で貼り合せて紙子を作った。

「こうして観音様と一緒なら、如来様も早ようお迎え下さるやも知れぬ」。翌る日からこれを肌にまとった。若し此の姿を見る者があったとすれば、その狂態にどんな思いをした事であろう？　然し今の真覚には何の疚しさも無い。それを着てからは何となく肌にも心にも或る温もりを感じた。それには紙の温みだけではないものがあった。だが寒気のきついせいか彼は正月の二十日過ぎから手先が痺れるようになり、その感じは一日一日眼に見えて加わった。

「今日は正月の二十五日。元祖上人の御命日だ。わしのような者でも、法然上人にあやかって、出来ることなら今日中に往生させて貰いたいものだ」

彼は、比叡颪の肌を裂るような寒さもいとわず、ワサワサと音を立てて紙子を脱いだ。それを自身の墓石の下に埋めようというのだ。彼はそれをおもむろに押し拡げた。

〝無い〟

そこには描線の痕すら見出せない。彼はよろめく脚をふみしめつつ、まろぶように戸外に出ると、黄昏の残照に映える空にこれを透かし見た。

「確かにこれを貼り合せた時には……」

茫然として空を見上げた真覚の面を、正に比叡の山巓に没せんとする夕陽の一条の光芒が射た。

「真覚さん！」

不意に背後から呼びかけられて振り向く真覚の眼にとびこんで来たのは、羅をまとい、微笑をたたえた妙春の姿である。

「〝おおっ！　妙春〟いや、妙春ではない。如意輪さまじゃ？」

伊勢への道

高橋良和

法然上人の行動半径は割合いに狭い。

岡山県に生れた法然上人が、比叡山、そして京都、兵庫、四国、大阪ということで、上人の遺跡もこの範囲になっている。

然し上人の遺跡であるといわれるところは、二十五霊場として残っているのであるから、それをみると、奈良、伊勢にも遺跡がある。

その一つ伊勢市一ノ木町に欣浄寺という寺がある。二十五霊場の第十二番の寺である。

さて本年に伊勢神宮の遷宮の年であり、伊勢神宮への参拝も一入多いようであるが、その伊勢市の欣浄寺には、法然上人の日の丸名号が什宝として保存されている。

日の丸名号というのは、太陽のなかに、南無阿弥陀仏が書かれた非常に珍しいものである。

これは法然上人の筆である、といわれているが、そうなら法然上人は伊勢神宮に参拝したことになる。その史実については、あまり知られていないが、寺伝はそうつたえている。

その寺伝によると、法然上人は比叡山黒谷青竜寺において浄土宗を建てられて後、この伊勢神宮に参籠されたことがあったようで、この欣浄寺がその旧跡であったらしい。

このときである。上人が七日間伊勢神宮にまことを捧げて念仏の弘通を祈念したのである。

満願の日というから七日目のことであったらしい。はるかかなたの大海の上にさん然と輝く太陽がのぼり、その太陽のなかに、南無阿弥陀仏の名号が輝いたことを見たというのである。

もちろん法然上人その人であったから、他の人にそれが見えたかどうかは疑問であるが、法然上人はその名号の輝くのを見て、これこそ我がすすめる念仏が、いよいよ全国にひろまるきざしである、と伊勢神宮の大神の神慮とうけとって、太陽のなかの名号をそのまま写しとったのが、この日の丸名号である。

わたしは二、三ヵ月前に知恩院の和順会館の地下道の壁面にかける二十五霊場の絵の解説と、時代的な考証をひきうけた際に、この日の丸名号の図に苦心した。

そして揮毫の馬堀喜孝画伯におねがいして、はるかなる海原の上に出た太陽のなかに、名号を画いていただき、それを拝んでいる法然上人ということで、一応この欣浄寺の霊跡をあらわすようにした。その名号は当御門主におねがいして御染筆をいただいたものである。

出来あがった絵をみて、本当に神々しく、そして悠大な感じに画かれているのに感心させられたのである。

ところがこの日の丸名号について、もう一つの伝説がある。これは欣浄寺が兵火にかかってその寺の宝が焼失した際に、この名号だけが残ったのである。

そのときの様子は、この寺が火の中にあったときに、不思議にも火中から、この名号が飛び出して篠葉(ささのは)にかかり、光明赫々と輝いたということである。それでこの名号のまたの名を篠葉名号ともつたえている。

この名号は、同寺の左須弥壇に安置している。

ところで法然上人が四国流罪の際にこのような神慮によって、念仏弘通のことの御守護をいただいた、ということで法然上人は、この寺に木像をつくっておくられたようであるが、それが大阪の専念寺に安置されていたらしく、天正十九年（一五九一）に、専念寺の頂誉上人が夢にこの木像は伊勢の欣浄寺におくるべしとあったということで、満月天くだって本堂に入る、という夢告によったということで、この御影を満月の御影と称している。

木像は一米余りであるから、かなり大きい。

往生は世にやすけれど皆人の、まことの心なくてこそせぬ。

という詠歌がこの寺のものである。

日本神道の発祥の地伊勢に、法然上人のこのような名号があるのはうれしいことであるし、本地垂迹の思想からしても、この太陽こそ伊勢神宮の祭神であり、そこに名号があらわれたという点で念仏のおしえが、国民の上に大きく生きることをあらわしたものであろう。

伊勢における法然上人ただ一つの霊跡である。

浄土宗の国宝

富岡鉄斎の画幅

近代画家の中で鉄斎の画ほど偽物の多いのもなかろう。やはり作品の数が非常に多いことからそうなったのであろうが、独学ともいえる大和絵や中国の画風など、先人の手法を独自に解釈して放胆な筆致となったことから偽物が多くできるようになったのかも知れない。けれど何といっても南画の系統をひく画家としては忘れることはできない人でもある。

鉄斎の生家は京都三条衣棚の法衣商で、その次男として生れた。六、七歳ころより漢学を山本荘園・岩垣月洲などに、国学を大国隆生に学んだ。どうも絵の勉強は十五歳をすぎてからのようだ。少年期の絵は浮田一蕙・小田海仙に習った。見逃せないのは蓮月尼などにも教化を受け、作品にもそうしたことがよくでていることである。また春日潜庵に陽明学を、羅渓慈本に仏教や詩文を学んだ。ともかく学問的にも教養的にもいろいろな経験をつんだといえる。ところが江戸末期に勤皇の志士と交際し、安政の大獄で師友の多くが捕まってしまった。幸か不幸か彼は耳が悪かったので大難をまぬがれた。その後長崎などに旅行し、小曽根乾堂・木下逸雲などと交際しながら南画を習ったり、私塾を開いて本の出版（孫呉約説など）などをしたりしていた。明治六年湊川神社の権禰宜となったり石上神社の小宮司、同年末には大鳥神社の大宮司などもした。明治十三年には室町に居を定め、文人画家としての生活がはじまった。けれどその作品などは一度も展覧会などに公表していない。けれど晩年近い大正六年八月には、帝室技芸員や帝国美術院会員に推されている。

鉄斎は学者をもって自任していた。博学であり書物にも通じ、その反面旅行好きで歴史や地誌、風俗などをたずねて全国をまわっている。やはりそうしたことが一見自由自在に見え放胆であるが独自の芸域にまで発展した原因だろう。

鉄斎の青年時代、その知遇を得て画の勉強ができたのも前田正名の援助が大きい。氏の長男正次氏の遺志により昭和四十年五月に鉄斎の画二十八幅が知恩院に寄附された。渓山蒼翠をはじめとして、新しい宗宝ともいえよう。彼が自画自賛して寄附した山輝水媚図などとともに新宝物館に収められている。鉄斎関係のまとまった作品群は日本一であろうし、それぞれの作品からは博識であった彼の性格のにじみでるようなものばかりである。南画系の自由な筆致に感動を禁じえないのは私一人であろうか。

（田中祥雄）

富岡鉄斉筆（京都知恩院蔵）

—泉瀑巒層—

—獅子独行—

「浄土」購読規定

一部 定価 百円
（送料十二円）

会費一ヵ年金一、二〇〇円
（送料 不要）

浄土 十一月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可
昭和四十八年十月二十五日 印刷
昭和四十八年十一月一日 発行

定価 百円

編集人 宮林昭彦
発行人 佐藤密雄
印刷人 関二三男
印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六
発行所 法然上人鑽仰会
電話東京二六二局五九四四番
〒一〇二一 振替東京八二一八七番

昭和十年五月二十日　第三種郵便物認可　（毎月一回一日発行）
昭和四十八年十月二十五日印刷　昭和四十八年十一月一日発行

絵伝『法然上人』

かねて若い世代にむけての伝道文書をとの声しきりでしたが、このたび開宗八百年記念出版として、勅修御伝にのつとつた新しい感覚の絵伝『法然上人』が発行となりました。
青少年はもとより、博い層にわたる檀信徒方への施本として、開八慶讃法要などの機にご利用頂きますれば幸甚です。

B5 変形版（タテ20cm × ヨコ22cm） 24頁

定価		180 円	〒 80円
50冊以下	単価	180 円	送料実費
50冊以上	〃	170 円	
100冊以上	〃	160 円	送料無料
200冊以上	〃	150 円	送料無料
500冊以上	〃	140 円	送料無料
1000冊以上	〃	135 円	

京都市東山区林下町
発行所　浄土宗宗務庁

"御年始のご挨拶がわりにご利用を"

『浄土宝暦』

・一部 30円（200部以上より 単価27円）
・送料実費　B6版　40頁

〒102　東京都千代田区飯田橋1－11－6
発行所　法然上人鑽仰会
電話（03）262－5944番

浄土　第三十九巻　第十一号　定価金百円（送料十二円）